これからの猪猟〈23回〉

田宮　治

猪犬芸の極致、ラウンド芸

極めてしまえば単独猪猟ほど気楽で楽しい猟法はない。これが「これからの猪猟」で生き残る重要な戦術となる。その一方で、誰にも頼らず、一流猪犬に仕上げるために、犬たちの世話から訓練までのすべてを一人で実行していくのである。

この猪猟の完成は、長い非猟期に黙々とこなす猪猟の準備こそ、猟期に突入してからの泣き笑いを決定づけることになる。

特に猪犬の最上芸であるラウンド芸ともなると、いかに猪猟に慣れた達人であっても、この芸を教えることはできない。この芸は犬自身が持つ天性の猟能であって、実戦で主人が確実に猪を撃ち獲り続けることで、開花していくのである。

これら究極の噛み止め芸や極致のラウンド芸を極めていない猪猟人が「何だ、それくらいの芸なら私の犬でもできるわい」と思うかもしれないが、本物の極致の猪猟芸はどの芸を取っても完成度が高いのだ。

一、二度猪を場当たり的に止め切るのではなく、いつでも当たり前のように確実に止め切り、「さあ、どうぞ撃ってください」と見事に鳴き続けて待っているのが一流芸である。だから、たまに猪が止まる猟芸とは全く中味が違うのである。

このような究極の猟芸は、猪猟人の誰もが切望するだろうが、並の努力や挑戦で完成するものではない。

「さあどうぞ、この猪犬たちの激戦の勇姿を見てください」と、そして「どうですか、この噛み止め芸は、この絡み合いは……」などと自信もって紹介できるようになるまでには、気の遠くなるような歳月が必要となる。

超一流の猪犬と究極の猪犬芸完成の道順に近道はない。あるとすれば日々の努力と犬への愛情で、これに勝る近道はないと思っている。

さて、猪の戦力や動向を十分に知った上で、己の戦力を知る、つまり犬たちとともに実戦を繰り返しながら何度でも頂点に挑む体験を積み上げることが、己の猪猟の実力を知ることであり、その繰り返しが絶対に勝つための大切な準備なのである。

この長年にわたる努力と苦労で築いた万全の備えがあればこそ、対戦相手である恐ろしい親仔猪を探し当て、確実に見切った時でも「よしきた。これはいただきだ。三頭まとめて面倒みてやる」と、つぶやけるのである。

ごく一般的な猪猟の常識でいうなら、親仔猪の足跡を見切っていながら、その怖さや恐ろしさも感じず、大喜びで「これはいただきだ。三頭まとめて面倒みてやる」と、大声で嘯（うそぶ）く猪猟人がいたとしたら、そのご仁は犬たちとともに実戦を積み重ねて頂点を極めた猪猟の名人か達人か、あるいは本当の猪猟を知らない血気に逸る素人だろう。

「私は名人だ、達人だ」などという気はさらさらないが、どんな猪にも自信をもって対決を挑めているのは、単独猟のためタツがいないことを十分に補っても、あまりある実力を持った一流猪犬軍団がぞっくり揃っているからである。

今日の猟場は、何度も猪と戦って良い成果を積み上げている勝手知った所である。

その猟場の中に猪が確実に潜んでいるとなれば、どんな猛猪であろうと恐れるに足らずである。これは天が恵んでくれた絶好のチャンスなのだ。

私は逸る気持ちを抑えて、一つひとつ忘れ物のないよう入念に猟支度をした。

「さあ行くぞ。ヨシ、来い、シロ、来い」と声をかけ、GPSを首にしっかりと付け、順次車から送り出した。

そして、最後に送り出すマロ号には、どこで猪止めしても鳴き声の入る無線付きGPSを付けて入山となった。

犬たちは窮屈な車の箱からやっと解放された喜びと、大好きな猪猟実戦に張り切って、小気味良い動きで早くも猪の気配を感じ取っているようだ。いつもの堀割り峠（二〇メートル）道を登っている。

仲良しトリオのマロ号、ヨシ号、シロ号。この3頭の犬芸があればいかなる猪でも恐るに足らずである

私はマロ号たちの動きを見極めながら、ゆっくりと大峰筋に続いている小道を進む。そして、今日の一番大切な対戦相手が潜む寝屋の特定と、その場に目がけて突進させる作戦を立てるために、今日の猟場全体が見渡せるキャンプ場裏に設置されている見晴らし台に立っていた。

既に十一時三十分、快晴で無風の山々は見慣れた光景だが、心が洗われる美しさである。

真上から降り注ぐ太陽の光の下で「あの辺りに登って来た親仔猪は、やっぱりあの大峰筋を越えて崖下に広がる竹と雑木の大藪だ。いつも寝ているあそこ以外にない」と、狙いを定める。

そして、急いで元の尾根道に戻り、GPSで犬たちを確認すると、三頭まとまって大峰右下に広がる小峰を二本越え、今朝見切った三本目の小峰と小沢に向かっている。

思ったとおり犬たちの行動は六日前のブイ号、カツ号、武蔵号の動きと全く同じである。

この先も恐らく前回の大猪が登った小峰を今回の親仔猪も登っているようだから、寝屋を攻めるコースも全く前回と同様の予感がする。

これは、あの崖下の大藪で母猪が犬たちに止められたら、母猪は仔猪を守って動くまい。ボサ藪で立ち入ることもできないあの場所で噛みまくり押しまくられたのでは、いかに一流猪犬たちであっても無傷での完勝とはいくまい。

この猟場は難攻不落の寝屋だから、親仔猪が選んだ山中で一番安全な場所なのだ。

そんなことを考えながら、大峰筋の小道を突き進み、前回と同様に篠竹の茂る小道沿いにある一〇メートルほど突き出た小峰の頂上に立って、犬たちの動きと猟場全体を見渡した。

もし狙いどおりだとすると、大峰筋を越えた左の崖下五、六〇メートル辺りの大藪に、前回と同様にこの親仔猪も潜んでいるに違いない。この恐ろしい親仔猪を今朝見切った時点で、この対戦は凄い激戦になると思った。

犬小屋の条件は日当たりが良いことである。お犬様の健康はお日様である

こんな至難の戦いを見事に勝ち抜けば、猪犬芸をより高める最高の実戦になる。だから、絶対勝つために名代の猪犬であるヨシ号、シロ号、マロ号で、今日の一戦をわが戦史に残る名勝負としたかったのである。

ヨシ号とシロ号は本来、強烈な噛み止め犬だが、相手の反撃が強力な大猪の場合、猪から何㍍も離れて逃げ道を断ち、鳴き続けて止め切る鳴き止めに変身する。そして、タイミングを計りながら噛み止めて鳴き止めるという、自在の極芸を見事に操る凄い猪犬に完成している。

この二頭に加え、マロ号は実戦でその戦いぶりを目の当たりにした数多の猟友たちが、あっと驚く極致の芸を次々に繰り出し、追い出した猪を何度でも止め切り、必ず撃ち獲らせるのである。

マロ号はヨシ号、シロ号と同様に強烈な噛み止め芸を身上としている。さらに噛み止め、鳴き止めを前進させた猪の行く手を遮ると同時に、止め猪の周りをぐるぐる回るラウンド芸もしっかり会得している。

このマロ号一頭だけでも、大猪を見事に止め切り、何度でも勝負できる実に頼りになる名猪犬なのである。

私は今までも猟場で出くわす猛猪には困りきっていた。必死で走って犬たちの鳴き声を左下に聞きながら、さらに五〇㍍先に下りている小峰の上に立った。

「よし、これでいつも逃げ切る逃走路は断てた。あとはこの小峰の下側からキャンプ場方向に追い込む以外ない」と銃を握りしめ、ゆっくり小峰の小杉林を下った。

犬たちは猪を真竹の大藪で止め切り、ワンワン、ギャンギャンの大激戦になっている。猪はグォーッグォーッ、ブツブツと母猪が仔猪を守って、吠え続ける恐ろしいまでの攻撃音である。

遂に願ってもない大激戦の火蓋が切って落とされた。

会員のひろば

狩猟点描 投稿歓迎

●実猟体験記（成功談・失敗談）、愛犬物語、猟犬の飼育・管理・訓練あれこれ、トライアル必勝法、愛銃物語、射撃上達法など、会員の皆様の声をお待ちしております。

●原稿枚数　400字詰原稿用紙10枚程度

●原稿送付先　全猟編集部

※なお、編集の都合上掲載が遅延したり、不掲載となる場合がありますのでご了承下さい。